

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鎌倉時代における呉音声調の位相差 : 親鸞加点本を資料として
Author(s)	佐々木, 勇
Citation	国語国文 , 82 (1) : 15 - 33
Issue Date	2013-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00034078">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00034078</a>
Right	Copyright (c) 2013 by Author
Relation	



# 鎌倉時代における呉音声調の位相差

——親鸞加点本を資料として——

佐々木 勇

## 一、本稿の目的

本稿の筆者は、平安・鎌倉時代の日本漢音に、文献の種類による字音の位相差が存した、とする考えを提出した。<sup>1</sup>

本稿は、鎌倉時代の日本呉音資料を対象として、文献の種類によつて字音声調の位相差が存したものの可否か、存したならばそれはいかなるものかを調査することを目的とする。

## 二、研究の方法

文献種の差による位相差を調べるのが目的であるので、文献種以外の差は、可能な限り小さいことが望まれる。

そのため、同一人の同時期の加点になる、文献の種類が異なる呉音読資料を対象として選び、それらを比較する方法を採る。

## 三、本稿の対象資料

鎌倉時代の呉音資料中、右の条件に適用ものとして、親鸞加点の資料群が存する。親鸞(一一七三—一二六二)は、青年期から晩年まで、各種の文献を残している。<sup>2</sup> 具体的には、漢文本文のものに字音直読資料と漢文訓読資料とが、仮名を交える文献に漢字片仮名交じり文(『西方指南抄』の類)・片仮名漢字交じり文(『一念多念文意』の類)・平仮名漢字交じり文(平仮名本『唯信抄』、書簡の類)が遺存している。

ただし、漢字片仮名交じり文・片仮名漢字交じり文・平仮名漢字交じり文は、親鸞晩年の書写加点資料に偏る。そして、片仮名漢字交じり文には声点加点が無く、平仮名漢字交じり文では平仮名本『唯信抄』に声点一例が存するのみである。

そこで、まず、親鸞青年期の字音直読資料と漢文訓読資料との声調を比較し、次に、晩年の字音直読資料・漢文訓読資料・漢字

片仮名交じり文の声調を比較することとする。

### 1. 親鸞青年期における字音声調資料

親鸞青年期の遺文は、親鸞が法然の門下にあつた吉水時代、親鸞二十九歳〜三十四歳（一一〇一〜一一二〇六年）頃に書写された<sup>3</sup>とされる『觀經・阿弥陀經集註』のみである。

『觀經・阿弥陀經集註』の經本文には、字音直読の声調を示す声点<sup>3</sup>が加点されている。

一方、行間・紙背に書き込まれた漢文註文は訓読されており、漢語声調を示す声点<sup>3</sup>が加点されている。この<sup>3</sup>『觀經・阿弥陀經集註』經本文声点と<sup>3</sup>『觀經・阿弥陀經集註』註文声点とを、親鸞青年期における字音声調資料とする。なお、原本閲覧の機会が得られないため、調査は、『佛說無量壽觀經』（一九七三年、日本仏教普及会）および『親鸞聖人真蹟集成』に基づく。

### 2. 親鸞晩年期における字音声調資料

晩年の字音直読資料として、<sup>3</sup>真佛書写本専修寺藏建長八年（一二五六・親鸞八十四歳）写『四十八誓願』への親鸞加點朱声点<sup>3</sup>がある。

また、同期の漢文訓読における漢語声調資料として、<sup>3</sup>建長八

年加點『浄土論註』の朱声点<sup>3</sup>および、<sup>3</sup>坂東本『教行信証』の大墨声点<sup>3</sup>を採り上げる。<sup>3</sup>坂東本『教行信証』大墨声点は、六十歳頃から晩年まで、数度に亘って加點されたものと考えられる<sup>7</sup>。

漢字片仮名交じり文で、建長八年（一二五六）に近く、比較的まとまった声点加點例が得られるものに、<sup>3</sup>一二五七年以前書写『唯信抄（西本願寺本）』と<sup>3</sup>一二五七年書写『尊号真像銘文（建長本）』とがある。よつて、この二資料を、晩年の親鸞加點漢字片仮名交じり文として選ぶ。

なお、右五本の調査は、左と『増補 親鸞聖人真蹟集成』（二〇〇五〜二〇〇七年、法藏館）とに依る。

- ③ 『四十八誓願』―『影印高田古典〔第一卷〕真佛上人集』（一九九六年、真宗高田派教学院）、④ 『浄土論註』―浄土真宗本願寺派 総合研究所藏カラゝ写真、⑤ 坂東本『教行信証』―『顯浄土眞實教行證文類（坂東本）影印本』（二〇〇五年、真宗大谷派宗務所）、⑥ 『唯信抄（西本願寺本）』―浄土真宗本願寺派 総合研究所藏カラゝ写真、⑦ 『尊号真像銘文（建長本）』―『尊號眞像銘文』（一九六七年、法雲寺）。

四、調査結果

1. 親鸞青年期における字音声調に見られる位相差

A. 比較方法

①「觀經・阿弥陀經集註」訓読部分の声点が全七六例でしかなく、その全例をまず掲げ、それと同じ字への、②經文字音直読部分における声点加例を対比させる。

B. 比較結果

なお、語頭・句頭字以外では前接字声調の影響があり得るため、語頭・句頭例を優先する。

語頭・句頭例以外は、へへに入れて示す。③註文の所在は、便宜上、「増補 親鸞聖人真蹟集成」の頁数、④本文所在は觀經・阿弥陀經それぞれを觀・阿で示した上、各行数で記す。

<p>①「觀經・阿弥陀經集註」註文訓読声点</p>	<p>②「觀經・阿弥陀經集註」經本文字音直読声点</p>
<p>1 修<sup>上</sup>テ<sup>テ</sup>觀裏二九</p> <p>2 餘<sup>去</sup>觀裏二五</p> <p>3 縁<sup>去</sup>觀裏二六</p> <p>4 三輪<sup>上</sup>觀註三五</p> <p>5 成<sup>上</sup>觀裏十四、成<sup>上</sup>觀裏十四</p> <p>6 同<sup>上</sup>觀裏十四</p> <p>7 神<sup>平</sup>人<sup>平</sup>觀註五七</p> <p>8 神<sup>平</sup>人<sup>平</sup>觀註五七</p> <p>9 應<sup>平</sup>觀註三五、應<sup>平</sup>現<sup>平</sup>觀註三五</p>	<p>修<sup>去</sup>諸<sup>上</sup>三<sup>上</sup>味<sup>上</sup>觀330、修<sup>去</sup>行<sup>上</sup>諸<sup>去</sup>戒<sup>上</sup>觀346</p> <p>其餘<sup>上</sup>身<sup>去</sup>相<sup>平</sup>觀246、其餘<sup>上</sup>衆<sup>去</sup>相<sup>上</sup>觀253</p> <p>何<sup>去</sup>等<sup>上</sup>因<sup>去</sup>縁<sup>上</sup>觀43、以<sup>上</sup>無<sup>上</sup>縁<sup>上</sup>慈<sup>上</sup>觀218</p> <p>如<sup>上</sup>旋<sup>平</sup>火<sup>平</sup>輪<sup>去</sup>觀125、有<sup>去</sup>千<sup>去</sup>輻<sup>入</sup>輪<sup>去</sup>相<sup>平</sup>觀244、猶如<sup>上</sup>日<sup>上</sup>輪<sup>去</sup>觀410</p> <p>成<sup>去</sup>就<sup>平</sup>如是<sup>上</sup>阿23、成<sup>去</sup>阿<sup>平</sup>那<sup>上</sup>含<sup>上</sup>觀60、成<sup>去</sup>光<sup>上</sup>明<sup>上</sup>臺<sup>上</sup>觀98</p> <p>同<sup>去</sup>時<sup>上</sup>俱<sup>去</sup>作<sup>平</sup>阿40</p> <p>神<sup>去</sup>通<sup>上</sup>如意<sup>觀</sup>290</p> <p>及其<sup>上</sup>人<sup>去</sup>民<sup>上</sup>阿45等、去<sup>上</sup>十一例</p> <p>應<sup>去</sup>當<sup>上</sup>發願<sup>上</sup>阿63、應<sup>去</sup>時<sup>上</sup>即得<sup>觀</sup>78、應<sup>去</sup>時<sup>上</sup>即於<sup>觀</sup>328、應<sup>去</sup>墮<sup>平</sup>地獄<sup>觀</sup>392、應<sup>去</sup>墮<sup>平</sup>惡道<sup>觀</sup>403</p>

- 10 轉(去)スルカ(去) (觀註三八)
- 11 利(入) (觀裏十四)
- 12 識(入) 颺(觀裏二七)
- 13 失(入)スル(觀裏二七)
- 14 (去)專(去)雜(入) (觀裏二八)
- 15 神(去)飛(觀裏二七)
- 16 心(去) (觀註六〇・觀裏十二・十二・十三・二五・二五・二六・二七・二七・二九・二九・二九・三一・三一・三三・二二) (无上心(去) (觀裏二二))
- 17 稱(去)セシム(觀註六〇)、稱(去)セ(觀裏二六・二七・二九、稱(去)スル(觀裏一九)
- 18 生(去)ス(觀裏十二)、生(去)スル(觀裏二六)、生(去)シテ(觀裏二七)
- 19 文(去) (觀裏三二)
- 20 身(去) (觀註五〇)
- 21 專(去) (觀裏二七)、專(去)雜(入) (觀裏二八)
- 22 因(去) (觀註六〇)
- 23 蓮(去) (觀註五四)、寶(平)蓮(去) (觀註六〇)
- 24 人(去)我(平) (觀裏二七)

- 《婉(上)轉(上)葉間(去) (觀125)、右(平)旋(去)宛(上)轉(上) (觀207)
  - 《汚(平)利(入)剋(平)利種(平) (觀25)、光明王(上)佛利(入)剋(觀269)
  - 《衆(平)所(平)知(上)識(入) (阿4)、遇善知(上)識(入) (觀367)
  - 《不令散(平)失(入) (觀103)、憶(入)持(上)不失(入) (觀283)、無令(上)忘(平)失(入) (觀426)
  - 《雜(入)蓮華色(觀240)
  - 《神(去)通(上)如意(觀290)
  - 《心(去)不(上)顛(去)倒(平) (阿61)、心(去)之(上)所念(平) (觀36)、心(去)眼(平)无(上)郭(平) (觀59)等、(去)九例。
- 
- 稱(去)讚(平) 不可思議功德(阿68)、稱(去)讚(平) 諸佛(阿108)、稱(去)南(平)无(上)阿弥陀佛(觀348)
  - 生(去)彼國土(阿63)、生(去)此(平)惡子(觀42)、生(去)諸佛前(去) (觀219)等、(去)七例。
  - 文(去)殊(上)師(上)利(平)法王(平)子(平) (阿9)、文(去)殊(上)師(上)利(平)法(入)王(平)子(平) (觀4)
  - 身(去)塗(上)妙蜜(觀17)、身(去)紫(上)金(上)色(入)頂(平)有肉(入)髻(平) (觀229)
  - 專(去)想(平)不(上)移(上) (觀87)
  - 因(去)前(上)宿(入)習(入) (觀326)
  - 蓮(去)華方(去)開(上) (觀41)
  - 《及其(上)人(去)我(上) (阿45)等、(去)十一例



45 垂 <sup>(平)</sup> (観註五六)	(ナシ)
46 證 <sup>(平)</sup> セス (観註三二五)	(ナシ)
47 蓬 <sup>(平)</sup> (観註三八)	(ナシ)
48 境 <sup>(平)</sup> 細 <sup>(平)</sup> (観裏二七)	(ナシ)
49 境 <sup>(平)</sup> 細 <sup>(平)</sup> (観裏二七)	(ナシ)

例1は、註文の漢文訓読では「修」に上声点が加点され、字音直読の経本文では去声点が加点された例である。これは、この期に進行していた「一音節去声字の上声化」<sup>⑧</sup>が、字音直読に比して、訓読で進んでいたことを示すものと解される。対応例を持たない例37「鍾<sup>(平)</sup> 植<sup>(平)</sup>」も、一音節去声字が上声化した例と見られる。

例2「餘」は、その逆のように見える。しかし、これは、下段の字音直読例が去声字「其」に続くために上声となったものである。例3「縁」・例4「輪」も同様であり、見かけ上の相違と言えよう。

例5「成」・6「同」は、同一字の語頭・句頭声点加点例でありながら、漢文訓読では上声点、字音直読では去声点が加点されている。この漢文訓読の上声は、右の前接字声調の影響による調値変化形が、当該字の声調と認識されたもの、あるいは、一音節

と捉えられたものと解釈されている。<sup>⑨</sup>これらの例から、この現象も、字音直読に比して漢文訓読において進んでいた、と考えられる。

また、例78の「神<sup>(平)</sup> 人<sup>(平)</sup>」は、漢音形・漢音声調である。<sup>⑩</sup>呉音声調は、「神」去声(濁)、「人」去声である(例1524は、呉音声調を示す声点加点例<sup>⑪</sup>)。

例9「應」は、日本漢音平声、呉音去声であり、これも、註文は漢音声調、本文字音直読では呉音声調が採られている。

例35「余」は、経文の加点例を持たない。しかし、この註文における平声も、漢音声調に一致する。

なお、例10「轉」は、漢音上声・去声、呉音平声の漢字である。したがって、この対応例では、註文声点が呉音声調に、経文声点が漢音声調に一致している。経文の「婉轉」「宛轉」は、呉音読中心の最明寺本「往生要集」平安後期点「宛轉」(上26

ウ)、淨福寺本仮名書き「往生要集」鎌倉期点にも、「婉轉」(中25ウ)「宛轉」(中5ウ・7ウ・13オ・21オ・31オ・32ウ・64ウ)とあり、平安・鎌倉時代の仏教語として、漢音形が用いられていたらしい。本稿の対象とする親鸞「觀經・阿弥陀經集註」字音直読例が、「婉<sup>上</sup>轉<sup>上</sup>西」<sup>12</sup>「宛<sup>上</sup>轉<sup>上</sup>西」<sup>13</sup>と、漢音にはまれな連濁形であるのも、漢語として常用されていたためであろう。

例11～14では、註文訓読が入声の「急緩」を区別せず、下段の本文直読ではそれを区別している。

### C. 対象文献全体の調査

ここで、右表の比較から導かれた両者の相違点を、対象資料全体で確認したい。

#### ① 一音節去声字の上声化

「觀經・阿弥陀經集註」經文字音直読の声点と、註文訓読訓点の声点における、一音節字への去声点・上声点加点数は以下の通りである。なお、調査は、<sup>①</sup>は句頭、<sup>②</sup>は語頭における呉音声調に限定した。

<sup>①</sup>「觀經・阿弥陀經集註」音読—97%以上が去声点加点数例である。

<sup>②</sup>「觀經・阿弥陀經集註」訓読—去声点2例、上声点2例。

鎌倉時代における呉音声調の位相差

去声点加点数例…餘<sup>五</sup>(觀裏二五)、廻<sup>五</sup>シテ(觀裏二六)

上声点加点数例…修<sup>上</sup>シ(觀裏二九)、鍾<sup>上</sup>植<sup>上</sup>西(觀註五七)

註文の声点加点数例が少数であるため判然としないものの、先の一文字における比較から知られたとおり、一音節去声字上声化における両者の実態は異なっていたらしい。

#### ② 二音節去声字の上声化

句頭・語頭における「二音節去声字の上声化」は、先行研究で、呉音声調上の問題とされているため、漢音声調と判断される例は対象外とする。すると、二音節字への去声点・上声点加点数例は、次の数となる。

<sup>①</sup>「觀經・阿弥陀經集註」音読—去声点39例、上声点1例。

<sup>②</sup>「觀經・阿弥陀經集註」訓読—去声点35例、上声点4例。

全体数が少ない上に、問題とする上声点が少数であるため、両者の差は小さい。

しかし、<sup>①</sup>經文への上声点加点数例「水<sup>上</sup>鳥<sup>上</sup>樹林(觀281)」は、漢音声調とも一致する。直読における呉音句頭二音節上声字は、対象資料中に存在しないのかもしれない。

#### ③ 漢音声調の使用

<sup>①</sup>「觀經・阿弥陀經集註」經文字音読声点の全体(全二九一一例)を通じて、呉音声調と一致せず、漢音声調を示すと判定され



たものは、傍線を引いた、左の四字五例のみである。<sup>①②</sup>

右<sup>(平)</sup>旋<sup>(去)</sup>宛<sup>(上)</sup>轉<sup>(上)</sup>觀<sup>(207)</sup> 宛<sup>(上)</sup>轉<sup>(上)</sup>葉<sup>(去)</sup>間<sup>(去)</sup> (觀125)

侍<sup>(平)</sup>立<sup>(去)</sup>左<sup>(去)</sup>右<sup>(上)</sup> (觀151)

「宛轉・婉轉」については、先に触れた。「左」「右」に、他例では呉音声調を標示し、「左右」の語でのみ漢音声調を標示するのも、漢音読語の混入例として考えるべきであろう。

一方、<sup>③</sup>註文訓読では、先に指摘したとおり、漢音形・漢音声調を示す声点加點例が、全体数に比して多く存した。

#### ④ 入声における急・緩の区別

④ 「觀經・阿弥陀經集註」經文声点において、親鸞は、入声に急と緩とを区別している。<sup>③</sup>

この区別は、<sup>⑤</sup>註文訓読部分には見られない。

## 2. 親鸞晩年期における字音声調に見られる位相差

### A. 比較方法

親鸞晩年の資料として選定した、字音直読の<sup>⑥</sup>專修寺藏「四十八誓願」、漢文訓読である<sup>⑦</sup>「浄土論註」朱声点と<sup>⑧</sup>坂東本「教行信証」大墨声点、漢字片仮名交じり文の<sup>⑨</sup>「唯信抄」(西本願寺本)と<sup>⑩</sup>「尊号真像銘文(建長本)」を、右の青年期加點資料と同様に比較する。

⑥「專修寺藏「四十八誓願」は、「無量壽經」から四十八願を抜き出した文章量の少ない文献で、全三五二例の声点加點数である。前接字声調の影響を除外するため、句頭字への加點例に限定すると、さらに対象の声点は減少する。そのため、この「四十八誓願」句頭字声点加點例と同一の漢字に、<sup>④</sup>「浄土論註」朱声点・<sup>⑧</sup>坂東本「教行信証」大墨声点、および、<sup>⑨</sup>「唯信抄」(西本願寺本)・<sup>⑩</sup>「尊号真像銘文(建長本)」で声点が加點された例を求め、比較する。<sup>③</sup>

⑦「四十八誓願」の句頭の判断は、朱句切り点に依る。ただし、「四十八誓願」は、句切り点無加點の部分があり、「影印高田古典「第一卷」真佛上人集」複製本がモノクロであるため、朱点有無の判断困難な場合も存する。その場合、「四十八誓願」の声点とはば一致する声点加點がなされている西本願寺藏「無量壽經」正平六年写本の句切り点を参照する。

### B. 比較結果

右の比較方法を探るため、字音直読資料<sup>⑥</sup>「四十八誓願」の例が最上段となる次表として対比する。なお、「四十八誓願」では、句頭字声点加點例に限定したため、挙例の声点表示は当該字のみにとどめた。

◎專修寺藏「四十八誓願」

句頭字朱声点加點例

1 諸(去) 深總持者(十一ウ4)

2 无(去) 能稱量(九オ1)

3 知(去) 其數者(四ウ2)

4 爲(去) 衆生故(六ウ5)

5 修(去) 諸功德(五ウ4)、修(去) 菩薩行(七オ2)、脩(去) 短自在(四ウ5)

6 猶(去) 如明鏡(十四オ2)

7 其(去) 諸衆生(九オ1)、其(去) 道場樹(九オ5)、其(去) 有女人(十一オ2)

8 菩(去) 薩聞者(十ウ5)

9 於(去) 諸佛法(十七オ1)

④「浄土論註」朱声点・

①「教行信証」大墨声点加點例

詣(上) 有(平) (上105.3)、詣(上) 智(平) (三11.4)

无(上) 知(上) (下119.3)、无(上) 我(平) (三118.3)、无(上) 我(平) (三118.6)、无(上) (五30.1.2.2.30.2)

无(上) 知(上) (下119.3)、慮(上) 知(上) (三84.1)

(ナシ)

陸(入) 脩(平) 静(去) (六末82.2.83.7)

嘉(上) 猶(上) (六本89.3)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

①「唯信抄(西本願寺本)」

②「尊号真像銘文(建長本)」声点加點例

詣(上) 佛(入) (唯28.1)、且(去) 抛(平) 諸(上) 雜(入) 行(平) (尊76.3)、當(去) 知(上) 聖(平) 道(平) 諸(上) 門(上) 漸(平) 教(平) 也(上) (尊86.2)

无(上) 窮(上) (唯81.3)、无(上) 邊(上) (唯81.5)、无(上) 窮(上) 極(入) (尊21.2)、无(上) 上(平) 涅(平) 槃(去) (尊79.1)、无(上) 上(平) 菩(上) 提(上) (尊89.5)、无(上) 明(上) 長(去) 夜(平) (尊95.4)等、(上)十一例。

知(上) 識(上) (唯124.4)、當(去) 知(上) 聖(平) 道(平) 諸(上) 門(上) 漸(平) 教(平) 也(上) (尊86.2)

爲(上) 釋(入) 尊(去) 之(上) 使(平) 者(平) 弘念佛之(上) 一門(尊92.1)

修(上) セシメ(唯124.3)、修(上) (尊77.4.78.3)、修(上) シテ(尊84.1)、修(上) シ(尊88.2)、修(上) 多(上) 羅(上) (尊31.4)

猶(上) 傍(上) 於(上) 助(平) 業(入) (尊77.3)

其(上) 佛(入) 本(平) 願(平) 力(入) (尊11.4)

菩(上) 提(上) (唯113.4)、(天(去) 親(上) 菩(上) 薩(入)) (尊25.5)

興(平) 出(入) 於(上) 世(平) (尊103.4)、猶(上) 傍(上) 於(上) 助(平) 業(入)

10 除(去) 其本願(六ウ5)

11 窮(去) 微極妙(八ウ5)

12 五(平) 體投地(十二ウ5)

13 高(去) 四百万里者(九ウ1)

14 辯(平) 其名數者(九オ2)

15 宮(去) 殿樓觀(十ウ2)

16 使(平) 立无上(七オ4)

17 形(去) 色不同(一ウ3)

18 聞(去) 我名字(十六ウ2)、聞(去)

我名字(十六ウ5)

19 應(去) 法妙服(十三オ5)、應(去)

時如願(十四オ1)

(ナシ)

(ナシ)

五(上) 氣(去) (六末70.3)

高(去) 齋(平) (下127.2)、高(平) 士(平)

傳(六末69.6)

辯(去) (六末91.5)

宮(去) 殿(六本6.8)、(王(去) 宮(上))

(六末10.6)、後(去) 宮(平) (三144.8)

〈結(入) 使(上)〉(下5.1)

形(平) (六末67.2 68.1)、形(平) (六末68.2)

聞(去) (三54.3)、聞(去) 見(平) セリ(五

42.1)、聞(去) 見(平) スル(五42.6)、聞(平)

見(平) (五42.8)、聞(平) 見(平) ス(五

42.7)

應(去) (下5.2)、應(平) シ(上96.6 108.1下

104.6)、應(平) (四46.5 六末70.6)、應(平) ス

(六末70.6)

(尊77.3)

唯(去) 除(上) (尊10.4)

无(上) 窮(上) (唯81.3)、无(上) 窮(上) 極(入) (尊21.2)

二十五(上) 有(平) (尊81.2)

高(去) 貢(平) (唯75.3)

(ナシ)

(ナシ)

故(平) 使(上) 如(上) 來(上) 選(去) 要(平) 法(入) (唯46.1)、爲(上) 釋(上) 尊

之(上) 使(上) 者(平) 弘念佛之(上) 一門(尊92.1)

形(去) 像(平) (唯54.5)

聞(去) (尊12.1)、聞(去) 名(上) 念(平) 我(平) 愍(平) 迎(平) 來(去) 唯

32.4、聞(去) 名(上) 欲(入) 往(平) 生(去) (尊12.1)

應(去) 稱(上) 无(上) 量(平) 壽(平) 佛(入) (唯88.2)、五(平) 濁(入) 惡

(入) 時(上) 群(去) 生(上) 海(上) 應(去) 信(平) 如(去) 來(上) 如(上) 實(入)

言(上) (尊104.1)

言(上) (尊104.1)

20 常(去通) 修梵行(十二ウ2)

常(平) (六末 61.2, 63.7.0)、五常(平) (六末 74.5)、常(平) 子(六末 69.7)、常(平) 然(平通) タリ(六末 71.3)、常(平) 從子(六末 69.7)

21 欲(入通) 生我國(五ウ2・五ウ5)

欲(入) 覺(三4.1)

攝(入) 取(平) 心(去) 光(上) 常(去通) 照(上) 護(平通) (尊 106.4)、貪(去) 愛(平) 瞋(去) 憎(上通) 之(上) 雲(平) 霧(平) 常(去通) 覆(入) 眞(去) 實(入通) 信(平) 心(去) 天(上) (尊 108.2)、尋(去通) 常(上通) (唯 91.5)

22 發(入通) 菩提心(五ウ4・十二オ3)

開(去) 發(入通) (三7.5)

欲(入) 生(去) 我(平通) 國(入) (尊 6.4)、欲(入) 往(平) 生(去通) (尊 12.2)、拯(去) 群(去通) 萌(上) (尊 103.4)

23 一(入通) 生補處(六ウ4)

一(入) (教六本 50.8)、(玄) 虛(平) 虛(平) 沖(去) 一(入通) (六末 74.3)

發(入) スル(唯 100.2)、發(入) スレ(尊 104.5)

24 若(入通) 受讀經法(九ウ2)、若(入通) 不爾者(四ウ5・十オ4)、若(入通) 起想念(三ウ1)、若(入通) 可限量者(十オ1)

(ナシ)

若(入) 少(平) 一(入) 心(去) (唯 58.5)、若(入) 不(上) 往(平) 生(去) 者(平通) (尊 9.2, 9.3)

25 積(入通) 累徳本(七オ1)

積(入) 習(シ) (五46.1, 2)

26 那(上) 羅延身者(八ウ3)

一(利) 入(那) 身(三) 169.8

27 諸(上) 所欲求(八オ3)

諸(上) 有(平) (上 105.3)、諸(上) 智(平) (三11.4)

諸(上) 佛(入通) (唯 28.1)、(巨) 抛(平) 諸(上) 雜(入通) 行(平通) (尊 76.3)

28 壽(平通) 終之後(一オ4)、壽(平通) 終之後(十五オ3)

壽(平通) 天(上) シテ (二88.2)

(應) 去(稱) (上) 无(上) 量(平) 壽(平通) 佛(入通) (唯 88.3)、大(平通) 无(上)

29 嚴(去通) 淨光麗(八ウ4)、嚴(去通) (ナシ)

(ナシ)

(微) (上) 妙(平) 嚴(去通) 淨(平通) (唯 23.1)、首(平) 楞(去) 嚴(上通) 院(平)

飾奇妙(十ウ4)

30 生(去) 尊貴家(十五オ3)

31 身(去) 心柔軟(十一オ5)

32 來(去) 生我國(六ウ4)

33 稱(去) 我名者(五オ5)

34 超(去) 過百千億那由他(三オ3)

3) 超(去) 諸人天(十ウ4)

35 第(平) 三法忍(十六ウ5)

36 開(去) 化恒沙(七オ3)

37 臨(去) 壽終時(五ウ5)

38 貪(去) 計身者(三ウ2)

39 假(平) 令不與(六オ1)

40 誹(平) 謗正法(五ウ3)

41 復(平) 更(三) 惡道者(一オ5)

42 池(去) 流華樹(十ウ2)

43 遊(去) 諸佛國(七オ2)

44 觀(平) 其面像(十オ4)、觀(平) 其

生(去) (上) 7.4 7.5 30.2 30.3 30.3 60.6 三 44.1 4 54.4 5 54.5

135.4 等、(去) 二十六例。

身(去) (三) 133.5 6

來(去) 生(上) シテ (四) 6.5

稱(去) (上) 93.1 二 43.3 三 83.8 四 46.4 五 7.7

14.4、稱(去) スヘシ (上) 106.6

超(去) 絶シ (五) 55.4

《周(平) 第(平) 三(平) 法(平) 忍(平) (六本) 88.1》

開(去) 示(去) (六本) 104.6、開(去) 發(入) 聲 (三) 77.5、開(去) 闍(平) スル (三) 33

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

源(平) 信(平) 和(平) 尚(去) (尊) 69.2

生(去) 生(上) 海(平) 之(上) 大船(平) 筏(入) 也(上) (尊) 96.2 等、(去) 十例。

現(平) 身(去) 唯(去) 5.4、化(平) 身(去) 尊(去) 33.2

來(去) 迎(平) 唯(去) 55.1 尊(去) 62.4

稱(去) スル(唯) 87.5、稱(去) 念(平) 唯(去) 112.5 113.3 114.5、稱(去) 念(平) ス(唯)

120.4 稱(去) 念(平) 尊(去) 8.3 等、(去) 十一例。

超(去) 尊(去) 16.2 18.4 19.1 111.4

第(平) 十七(唯) 27.5、第(平) 十八(唯) 30.3

臨(去) 終(上) 唯(去) 97.1 3 101.1 尊(去) 8.3 4 62.4

(ナシ)

貪(去) 愛(平) 曠(去) 憎(上) 尊(去) 108.1 3 108.3 5 108.109

虚(上) 假(平) 唯(去) 64.2 2.5、内(平) 懷(平) 虚(上) 假(平) 唯(去) 67.4

唯(去) 除(上) 五(平) 逆(去) 誹(平) 謗(平) 正(平) 法(入) 聲 (尊) 10.4

專(去) 復(平) 專(去) 唯(去) 46.1

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

(ナシ)

画像(十四才2)

- 45 披<sup>(平)</sup> 弘誓鑑(七才1) (ナシ)  
 46 厭<sup>(平)</sup> 惡女身(十二才3) (ナシ)  
 47 係<sup>(平)</sup> 念我國(六才3) (ナシ)  
 48 稽<sup>(平)</sup> 首作禮(十三才1) (ナシ)  
 49 諷<sup>(平)</sup> 誦持説(九ウ3) (ナシ)  
 50 承<sup>(去通)</sup> 佛神力(七ウ3) (ナシ)  
 51 莫<sup>(入急)</sup> 不致敬(十三才2) (ナシ)  
 52 十<sup>(入急通)</sup> 方衆生(五ウ1) (ナシ)  
 53 觸<sup>(入緩)</sup> 其身者(十一才4) (ナシ)

- (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)  
 (ナシ)

この比較によっても、親鸞青年期加點資料と同じく、以下の相違点を指摘できる。

第一に、字音直読の㊦専修寺藏「四十八誓願」で去声点が加點され、他文献では上声点が加點される一音節字がある(例1、11)。これらは、字音直読資料ではかつての去声が保たれ、漢文訓読資料・漢字片仮名交じり文では上声に移行していたことを示すものと考えられる。<sup>20)</sup> 対応例の無い、42「池」<sup>(去)</sup> 43「遊」<sup>(去)</sup> も、字音直読資料において、去声が保持された例である。

第二に、㊦漢文訓読資料・㊦漢字片仮名交じり文に、漢音

鎌倉時代における呉音声調の位相差

読声調が見られる(例5脩<sup>(平)</sup>、13、20高<sup>(平)</sup>・辯<sup>(去)</sup>・宮<sup>(平)</sup>・使<sup>(上)</sup>・形<sup>(平)</sup>・聞<sup>(平通)</sup>・應<sup>(平)</sup>・常<sup>(平)</sup>)。

坂東本「教行信証」に漢音説が存することは、早くから指摘されてきた。<sup>20)</sup> しかし、坂東本「教行信証」ばかりでなく、例16では、呉音平声・漢音上声であったと考えられる「使」に、「浄土論註」と「唯信抄」・「尊号真像銘文」で、漢音声調と一致する上声点が加點されている。19「應」の平声も、該字の漢音声調である。

第三に、字音直読資料「四十八誓願」は入声の急・緩を区別

し、その他の資料ではそれを区別しないことが挙げられる。

なお、右の表には、青年期資料で指摘した「二音節去声字の上声化」例は、表われていない。次に、対象文献全体を調査し、「二音節去声字」についても見ることにする。

C. 対象文献全体の調査

① 一音節去声字の上声化

◎字音直読資料「四十八誓願」における呉音一音節去声字は、90%が去声点加声点例であった。

ところが、漢文訓読の「浄土論註」朱声点・坂東本「教行信証」大墨声点および漢字片仮名交じり文「唯信抄(西本願寺本)」「尊号真像銘文(建長本)」における、語頭の一音節去声字への声点加声点例は、次の通りである。

④「浄土論註」朱声点―去声点0・上声点12。

去声点加声点例…(ナシ)

上声点加声点例…无(上)知(下119.3)、非(上)作(下89.6)、非(上)迦(下90.1)、非(上)非(下90.1)、諸(上)有(上105.3)、至(上)韻(下85.1)、迦(上)才(下127.5)、殊(上)子(上56.5)、憂(上)慮(上48.3)、魏(上)下(下127.1)

◎坂東本「教行信証」大墨声点―去声点3・上声点42。

去声点加声点例…左(去)衽(六末63.2)、暴(去)風(六末75.5)、樓(去)觀(六本6.8)

上声点加声点例…左(上)道(六末70.5)、左(上)遷(六末63.1)、无(上)我者(三118.6)、无(上)五(30.1 30.2)、非(上)無(三141.5)、非(上)有(三8.6 5.6 6.7)、非(上)无(三141.7 6.4 6.6)、非(上)非(四34.1)、智(三11.4)、至(上)孝(六末97.3)、至(上)理(二77.1)、虚(上)六本3.8)、思(上)三(54.4)、慈(上)二(20.4)、蛇(上)六末57.5)、邪(上)六末84.6)、微(上)二(87.3 33.3)、龜(上)二(65.6)、違(上)六末92.2)、回(上)三(33.7)、疑(上)悔(六本9.8)、五(上)氣(六末70.3)、魔(上)軍(二129.2)、婆(上)蘇(三117.5)、感(上)知也(三84.1)、陂(上)泊(六末27.2)、希(上)有最勝(三6.1)、嘉(上)猶(六本89.3)、時(上)媚鬼(六末90.2)

④「唯信抄(西本願寺本)」―去声点3・上声点60。

去声点加声点例…弘(去)深(上31.1)、他(去)33.1)、他(去)經(上)他(去)佛(去)53.4)

上声点加声点例…易(上)行(平)道(平)34.1)、易(上)行(平)道(平)35.1)、易(上)行(平)44.1)、易(上)行(平)51.4)、廻(上)向(平)シテ(10.2)、廻(上)向(平)シテ(43.2)、廻(上)向(平)83.1)、機(上)54.2)、鬼(上)率(上)98.2)、疑(上)綱(上)104.3)、義(上)理(上)41.4)、虚(上)假(上)64.2 2.5 82.5)、功(上)能(上)55.5)、師(上)長(上)12.1)、思(上)推

(上) (27.5) 慈(上)尊(上) (64) 持(上)念(上)セム(53.4) 治(上)方(上)  
 (上) (94.5) 修(上)行(上) (116.3) 修(上)セシメ(124.3) 諸(上)佛(上)入(上)  
 (28.1) 多(上)生(上) (7.3) 知(上)識(上) (124.4) 如(上)來(上)尊(上)號(上)  
 (平) (29.5) 芭(上)上(上) (40.3) 悲(上)母(上)彌(上)陀(上)佛(上)入(上)  
 (125.1) 非(上)權(上)非(上)實(上)入(上) (85.3) 微(上)上(上)嚴(上)去(上)淨(上)平  
 (23.1) 不(上)孝(上) (25.1) 不(上)簡(上)上(上)貧(上)窮(上)將(上)富(上)  
 (平) (22.5) 不(上)簡(上)下(上)智(上)與(上)高(上)才(上) (32.5) 富(上)  
 不(上)簡(上)多(上)聞(上)持(上)淨(上)戒(上) (33.1) 不(上)簡(上)破(上)現(上)平  
 (平) 戒(上)罪(上)根(上)深(上) (33.1) 不(上)退(上) (34.4) 不(上)真(上)上  
 實(上)入(上) (62.2) 不(上)善(上) (63.5) 不(上)得(上)外(上)平 現(上)平  
 (67.3) 不(上)思(上)議(上)力(上) (75.4) 不(上)簡(上)破(上)戒(上)罪(上)平  
 根(上)深(上) (77.2) 不(上)信(上) (117.5) 4.5.5 菩(上)提(上) (113.4)  
 魔(上)界(上) (116.5) 理(上) (85.3) 117.4 流(上)轉(上) (72.2) 婆(上)界(上)  
 (平) (35) 无(上)窮(上) (81.3) 无(上)邊(上) (81.5) 癡(上)闇(上)平  
 (110.1) 餘(上) (26.3) 2.2 餘(上)行(上) (42.3) 餘(上)行(上) (37.5) 餘(上)  
 佛(上) (49.3) 鹿(上)妙(上) (19.3)

⑧ 尊号真像銘文(建長本) 去声点4・上声点80。

去声点加加例…其(上)國(上) (23.3) 他(上)力(上) (64.19.25.1)  
 上声点加加例…其(上)國(上)不(上)逆(上)違(上)自(上)然(上)之(上)  
 (上) 牽(上) (23) 其(上)佛(上)本(上)願(上)力(上) (11.4) 他(上)

鎌倉時代における吳音声調の位相差

(上) 力(上) (18.3) 彌(上)猴(上)情(上)難(上)學(上) (87.3) 阿(上)彌(上)  
 (上) 陀(上) 如(上)來(上) (28.4) 阿(上)轉(上)入(上)菩(上)提(上) (100.3) 依(上)  
 (31.4) 易(上)往(上)而(上)无(上)人(上) (21.3) 易(上)往(上) (21.3) 易(上)  
 (上) 行(上) (86.5) 易(上) (85.5) 86.6) 違(上) (23.5) 迂(上) (18.5) 何(上)  
 (上) 悲(上)智(上)眼(上)闍(上) (95.3) 廻(上)心(上) (106.1) 機(上)有(上)  
 奢(上)促(上)者(上) (85.1) 機(上) (85.2) 宜(上)哉(上)源(上)空(上) (45.3) 疑(上)  
 (上) 雲(上)永(上)晴(上) (47.4) 疑(上)雲(上) (47.5) 虛(上)空(上)  
 (34.5) 愚(上) (47.3) 愚(上)禿(上)親(上)親(上)正(上)信(上)  
 (平) 偶(上) (99.4) 遇(上)无(上)空(上)過(上)者(上) (35.2) 師(上)主(上)  
 (97.3) 時(上)節(上) (73.8.2) 修(上)多(上)羅(上) (31.4) 修(上)セム(上)  
 (77.4) 修(上)ス (78.3) 修(上)シテ (84.1) 衆(上)生(上)  
 (上) (4.1) 11.3 衆(上)水(上)海(上) (106.2) 豎(上) (18.4) 18.5) 致(上)上  
 (14.1) 如(上)來(上) (4.3) 7.1) 7.4) 如(上)來(上)所(上)以(上)興(上)出(上)  
 世(上) (102.3) 如(上)衆(上)水(上)入(上)海(上)一(上)味(上) (106.3) 婆(上)  
 運(上)數(上)般(上)豆(上)上(上)菩(上)薩(上)論(上)曰(上) (25.3) 婆(上)數(上)  
 般(上)豆(上) (25.3) 悲(上)願(上) (97.4) 不(上)取(上)正(上)覺(上)  
 (93) 不(上)取(上)正(上)覺(上) (94) 不(上)退(上) (13.4.5) 不(上)  
 (上) 逆(上)違(上) (23.3) 不(上)可(上)上(上)議(上)上(上)佛(上)入(上)  
 (30.1) 不(上)思(上)議(上)力(上) (80.5) 不(上)斷(上)煩(上)惱(上)得(上)入(上)涅槃(上)  
 (105.1) 無(上)智(上)無(上)才(上) (95.1) 猶(上)傍(上)於(上)助(上)





する(傍線の例がそれに当たる。漢呉同声調のものは採り上げない。◎「教行信証」大墨声点以外は、漢音声調と判定した全例を掲げる。)

④「浄土論註」

長(平)シテ(上)59.6、明(平)君(平)王(上)92.6、賢(平)臣(上)92.6、應(平)シ(上)96.6、應(平)シテ(上)104.6、應(平)ス(下)85.1、仁(平)義(上)禮(上)智(上)信(上)112.2、總(去)姑(平)118.4、通(平)王(上)118.6、神(平)上(上)118.6、神(平)ナラムヤ(下)50.4、能(去)神(平)下(下)50.4、神(平)智(平)下(下)127.2、映(去)徹(上)下(下)34.3、大(去)夜(平)下(下)64.4、玄(平)籍(上)下(下)85.2、并(平)州(下)127.1、没(平)水(上)縣(去)下(下)127.1、魏(上)下(下)127.1、高(去)京(平)下(下)127.2、高(去)上(下)127.2、人(平)外(去)下(下)127.3、梁(平)國(上)下(下)127.3、天子(平)下(下)127.3、蕭(平)王(下)127.3

◎「教行信証」大墨声点

豪(去)富(二)38.4、風(平)航(平)二(二)47.7、服(平)膺(平)シテ(二)48.3、元(平)嘉(平)二(二)97.3、用(平)欽(上)二(二)98.1、勇(上)將(上)幢(上)二(二)129.2、二(二)138.1、日(平)域(上)二(二)138.1、天(平)子(平)二(二)139.7、人(平)倫(平)二(二)43.3、徒(平)衆(平)二(二)43.3、長(平)生(平)不(上)死(上)二(二)53.3、神(平)方(平)去(平)53.3、捷(平)徑(平)二(二)62.2、侍(上)臣(上)二(二)133.7、後(去)宮(平)二(二)144.8、外(去)人(平)三(三)154.7、仁(平)義(上)禮(上)智(上)信(去)二(二)165.8、精(平)舍(上)六(六)6.8など、全五三〇例。

鎌倉時代における呉音声調の位相差

④「唯信抄(西本願寺本)」

義(上)理(上)41.4、理(上)85.3、靈(上)地(上)8.1、主(平)君(平)46.4、功(平)47.3、功(平)4.1、忠(平)節(上)46.5、天(平)地(平)48.1、古(平)郷(平)40.5、高(去)貢(平)唯(平)75.3、不(上)簡(上)下(平)智(平)與(平)高(去)才(平)32.5、左(平)邊(平)觀(去)世(平)音(去)125.2、右(平)邊(平)大(平)勢(平)至(平)125.2

◎「尊号真像銘文(建長本)」

聖(去)覺(上)和(平)尚(去)4.2、曇(去)鸞(平)和(平)尚(去)82.89.90.91.4、曇(去)鸞(平)和(平)尚(去)101.3、光(去)明(上)寺(平)善(平)導(平)和(平)尚(去)37.4、首(平)楞(去)嚴(上)院(平)源(平)信(平)和(平)尚(去)69.2、功(平)61.5、天(平)108.5、勅(上)命(去)28.50.4、報(去)ス(上)98.5

右の如く、呉音読中心の右諸文献中に、「天子」「義理」「和尚」など、漢音読されることが常であった漢語が、その常用音のまま使用されたものと見られる。

④入声における急・緩の区別

字音直読資料である専修寺蔵「四十八誓願」の声点加点到、入声の急と緩とが区別されていることは、別稿で述べた。

一方、坂東本「教行信証」大墨声点・「浄土論註」・「唯信抄」・「尊号真像銘文」は、親鸞遺文における他の漢文訓読資料・漢字片仮名交じり文同様、入声に急・緩を区別しない。

## 五、結論

以上、鎌倉時代の日本呉音声調に、文献の種類による位相差が存したものの否か、存したならばいかなる差かを探ることを目的とし、親鸞遺文を対象に、調査してきた。

その結果、呉音読中心の親鸞遺文では、青年期加点資料および晩年期加点資料において、字音直読資料とそれ以外（漢文訓読資料・漢字片仮名交じり文）とで、呉音声調に差が存したことが知られた。

その差は、次の点に見られた。

1. 字音直読資料に比して、漢文訓読資料および漢字片仮名交じり文は、「一音節去声字の上声化」が進んでいた。
2. 字音直読資料に比して、漢文訓読資料および漢字片仮名交じり文は、「二音節去声字の上声化」例も、多いらしい。しかし、この点は、判然としない。

そして、「呉音声調」における差以外に、次の位相差も指摘できた。

3. 字音直読資料に比して、漢文訓読資料および漢字片仮名交じり文は、漢音声調を多く交える。
4. 字音直読資料は入声に「急」と「緩」とを区別し、漢文

訓読資料および漢字片仮名交じり文は、それらを区別しない。  
 親鸞加点の他文献および他者の加点資料における実態調査が、次の課題である。

〈注〉

- (1) 佐々木勇「平安鎌倉時代における日本漢音の研究」(二〇〇九年、汲古書院)。
- (2) (3) 「増補 親鸞聖人真蹟集成」(二〇〇五〜二〇〇七年、法蔵館) 解説。
- (4) 佐々木勇「専修寺蔵『四十八誓願』建長八年真佛写本の朱訓点について」(「高田学報」第百輯、二〇一二年三月)。
- (5) 墨声点は、異なる形式が見られるため、朱声点に限定する。
- (6) (7) 佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について——坂東本「教行信証」声点の位置づけ——」(「訓点語と訓点資料」第二九輯、二〇一二年九月)。
- (8) 以下、「呉音一音節去声字」という用語を、院政期の呉音読資料で去声点加点例が多い一音節字として、佐々木勇「呉音一音節去声字の上声化の過程」(「鎌倉時代語研究」第十輯、一九八七年五月)以降使用している意味で用いる。
- (9) 奥村三雄「呉音声調の一性格」(「訓点語と訓点資料」第十八輯、一九六一年一〇月)、沼本克明「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」(一九八二年、武蔵野書院)四二二頁、佐々木勇「呉音二音節字に対する上声点加点例について」(「国文学放」第113号、一九八七年三月)、参照。
- (10) 日本漢音資料で、「神」は平声点、「人」には平声濁点が加点されて

いる。以下、漢音声調は、注(1) 佐々木著書資料篇に依る。

- (11) 以下、吳音声調は、承暦本「金光明最勝王経音義」・「類聚名義抄」和音・「法華経单字」・高山寺蔵「華嚴経音義」・安田八幡宮蔵「大般若経」・法華経音義諸本・法華経古訓点資料諸本に依る。

- (12) 注(9) 沼本著書、参照。

- (13) 注(6) 佐々木論文、参照。

- (14) 注(8) 佐々木論文、参照。

- (15) 「觀經・阿弥陀経集註」註文の全例は、表に掲げた。また、「觀經・阿弥陀経集註」経文中の全例は、注(9) 佐々木論文に記した。

- (16) なお、漢音声調と一致するため除外した例に、「婉」上通葉間(志)「觀」がある。当該例上欄には、朱筆で「婉(志)」の訂正が加えられている。このことから、本来句頭は去声であるという規範意識が、経文において強く働いていた、と見られる。

- (17) 対象から、梵語音訳字を除く。

- (18) 佐々木勇「親鸞筆『阿弥陀経』「觀無量壽経」の漢字音について」(比治山大学現代文化学部紀要) 創刊号、一九九五年三月、参照。

- (19) 中段の用例中、上・下が所在頭に有るものが「浄土論註」、漢数字が所在頭に有るものが坂東本「教行信証」である。下段は、所在頭に「唯」「尊」をつけることで、「唯信抄」と「尊号真像銘文」との別を示した。所在は、「親鸞聖人真蹟集成」頁数と行数とで記す。

- (20) 佐々木勇「西本願寺蔵『浄土三部経』正平六年存覺書写本の朱点について」一親鸞自筆加点点および龍谷大学蔵南北朝期加点点との比較——(訓点語と訓点資料) 第二二六輯、二〇一一年三月)。

- (21) 「五」は、吳音に去声(濁)と平声(濁)の両音があった。漢音声調は、去声である。

- (22) ただし、9「除」10「窮」における、㊸「尊号真像銘文」の上声点は、前接字去声・上声の影響によるものかもしれない。

- (23) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月)、佐々木勇「親鸞筆『教行信証』の漢音——出現箇所と加点理由——」(広島大学学校教育学部紀要) 第二部第十九巻、一九九七年一月)。

- (24) 坂東本「教行信証」入声点には、急・緩の声点が存する(前注小林論文、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月)。しかし、第一次加点の大きな墨声点に限れば、その区別は見られない(注(6) 佐々木論文、参照)。

- (25) 注(4) 佐々木論文、参照。

- (26) 漢字片仮名交じり文㊹「尊号真像銘文」に、語頭二音節への上声点加点例が少ない。これは、本文中に指摘した如く、この㊹が、部分的には字音直読資料とも言えるものであるためであろうか。

- (27) 「教行信証」に漢音読が多い理由については、注(23) 佐々木論文で述べた。ただし、この論文では、大墨声点のみを特立していない。

- (28) 三巻本「色葉字類抄」には、「天(平)鞋(上)帝(王)部」(前田本下22オ2)、「義(去)理(上)キリ」(前田本下63ウ6)、「和尚クワシヤウ」(黒川本中82オ2)、「神(平)妙(去)シシヘウ」(前田本下84ウ4)、「明主メキシユ」(前田本下60オ4) などとある。同一語の吳音読例は記載されていない。

- (29) 注(4) 佐々木論文。

- (30) 注(6) 佐々木論文。

(佐々木さきさき) 廣島大学大学院教授